１０／０１／２４　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　牧師

主　　題：教会の建て方４
聖書箇所：エペソ人への手紙　４章１３節

私たちはよく「私の教会」とか「私たちの教会」ということばを使います。教会を指すときに便利で適切な表現だろうと私も思いますが、聖書的に考えると「私の教会、私たちの教会」という表現は、ひょっとすると正しいものではないのかもしれません。間違っているとまでは言いませんが、聖書が教える「教会」とは、その教会に集う会員たちのものでも、その教会を導く牧師たちのものでもないのです。たとえ、そこにいる人たちがどれ程影響力を持つ人物たちであったとしても、偉大な権力を持っているような人であっても、教会とは人間のだれかが支配したり、所有物とするものではないのです。教会は「神の教会」です。そして、神だけがすべての教会を正しく治めるにふさわしいお方です。神だけがすべての教会を治めるその権威の座に座っておられるお方です。

☆神の設計図

イエスはこの教会を「わたしが建てる」とおっしゃいました。イエスはペテロが**「あなたは、生ける神の御子キリストです。」**（マタイ１６：１６）というその告白に基づいて、その上に**「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。」**（１６：１８）と告げられました。それゆえに、教会はこの神、キリストが建てる建て方に沿って建てられなければいけません。私たちの様々な想像やいろいろな策によって教会が建てられるべきではないのです。神の設計図に基づいて建てなければなりません。人間の知恵や様々な知識によって建てられるべきではないのです。

では、どのようにして私たちはこの教会を建てるべきでしょうか？このことを皆さんといっしょにこれまで見て来ました。

１．土台はイエス・キリスト

最初に私たちはコリント人への手紙第一３章の箇所を通してこのことを考えました。そこで私たちは、教会のリーダーたちが教会を建てるに当たって、必ず、イエス・キリストという土台の上に建てなければならないことを学びました。使徒や預言者たちがこのイエス・キリストに関して教えた教えとは、イエス・キリストという土台の上に教会が建てられなければならないということでした。私たちはそのことを考え学んだのです。

２．素材は正しい教理

そして、その土台の上に建てられる教会は、その土台にふさわしい素材で建てられなければいけません。その素材とは、このみことばを通して私たちに教えられている正しい教理、正しい教えです。それによって教会が建てられて行くのです。そのために教会のリーダーたちはみことばをしっかりと学ぶ必要があると学びました。みことばの学びに熱心になり、それを理解し、それを正しく人々へ語り伝える、それこそがまさに、教会のリーダーが為さなければならない最も重要な事項だったのです。

３．教会に賜物を持ったリーダーを与える

そして私たちは、エペソ人への手紙４章を学び始めました。そこでパウロは、教会に関して非常に大切な事柄を教えていました。最初に私たちは、キリストご自身がこの教会を建てるために、教会に対して賜物を持った人たちをお与えになったということを学びました。パウロはここで四つのグループに属する人たちの名前を挙げています。「使徒たち、預言者たち」が最初に挙げられていました。彼らは先程も言ったように教会の土台を据えた人たちでした。教会が始まって間もない創成期において、使徒や預言者たちは神からの直接的な啓示を受け取り、それをもって教会がどのように生きなければいけないのか、また、一人ひとりのクリスチャンがどのようにクリスチャンとしての生活を全うして行くべきなのか、そのことを教えたのです。彼らはまさに教会の土台を据えたのです。これは非常にすばらしいキリストからのプレゼントでした。

そして、その直接的な啓示の時代が終わり、聖書が完成し、クリスチャンがどのように生きるべきか、教会がどうあるべきか、その設計図がみことばを通して正確に記されたその後、神は教会に対して「伝道者たち」と「牧師・教師たち」と呼ばれる人たちをお与えになりました。彼らの働きは使徒や預言者たちと大きく変わるものではありませんでした。もちろん、彼らは神から直接的な啓示を受ける訳ではありませんが、けれども、彼らは神が語られたそのみことばを通して、教会を教え導いて行く責任があったのです。キリストは教会にそのような賜物を持った者たちをお与えになったのです。

４．リーダーの役割

与えられた彼らの働きとはどのようなものだったのでしょう？そのことも私たちはいっしょに考えました。エペソ人への手紙４：１２にはこのように書かれていました。**「それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、」**、賜物を持った者たちが神から与えられた働きは、教会にいる聖徒たち、クリスチャン一人ひとりを整えることでした。彼らはその働きに従事しなければならなかった、その働きを熱心に為さなければならなかったのです。

牧師・教師たち、伝道者たち、また、使徒や預言者たちはその働きをどのようにするのでしょう？それは二つの事柄によって、一つは「みことばを教えること」であり、もう一つは「祈り」でした。

ａ）みことばを教える

皆さんがよくご存じのように、Ⅱテモテ３：１６－１７**「聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。:17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」**、神のみことばは私たちクリスチャン一人ひとりが、神の前に**「十分に整えられる者となるため」**に必要なものです。それゆえに、神はみことばをお与えになったのです。ペテロはこのように言います。Ｉペテロ２：２**「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」**、神のみことばによってクリスチャンは成長すると言います。それゆえに、教会に与えられたリーダーたちはこのみことばを熱心に教えるのです。みことばを解き明かそうとするのです。なぜなら、このみことばによってのみクリスチャンは整えられた者へと変わって行くからです。

ｂ）祈る

でも、パウロがよく分かっていたこと、そして、この働きに従事しようとする者すべてがよく理解しているべきことは、たとえ私たちがどれだけ熱心にみことばを解き明かしたとしても、それを努力し頑張ったとしても、クリスチャン一人ひとりが整えられるのは、教会のリーダーたちが一生懸命に語ったからではないのです。パウロはこのように言います。Ｉコリント３：６－７**「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。:7 それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。」**。そのことをよく分かっているゆえに、熱心にみことばを学び、熱心にみことばを正しく解き明かす教会に与えられた賜物を持った人たちは、同時に、熱心に祈るのです。なぜなら、神が働かない限り一人ひとりの成長は起こらないからです。エペソ３：１４－１９にもこのように記されています。**「こういうわけで、私はひざをかがめて、:15 天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。:16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。:17 こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、:18 すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、:19 人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。」**。

皆さん、覚えていますか？使徒の働き６章に記されていますが、初代教会は様々な問題を抱えていました。そこで教会のメンバーたちが使徒たちの所にやって来て「何とかしてください」と願いました。そのときに、使徒たちはこのように言いました。「私たちはその様な事柄に煩っていてはいけない。やらなければいけないことがある。」、使徒６：４**「そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」**とそのように言ったのです。教会の初めからこのことは変わらないのです。教会が教会として正しく神の前に建て上げられるために、教会のリーダーたちが為さなければいけないことは、みことばを正しく解き明かし、そのみことばがそれを聞く人たちの上に豊かな成長をもたらすように、熱心に祈ることです。そのようにして、教会はそこにいる聖徒たち一人ひとりが整えられて行きます。

５．整えられた聖徒の奉仕

整えられた聖徒たちはどのようになりますか？そのことも私たちは見ました。彼らは奉仕の働きをし始めるのです。キリストは教会に賜物を持った教会のリーダーたちを与えただけでなく、エペソ４：７に書かれているように、一人ひとりすべてのクリスチャンに神は霊的な賜物をお与えになったのです。彼らが整えられて成長して行くときに、一人ひとりのクリスチャンは与えられているその霊的賜物を用いて仕えるようになるのです。人々は熱心にその賜物をもって互いに教え合い、戒め合い、助け合い、励まし合い、慰め合い、お互いに建て上げて行こうとするのです。教会にはたくさんの働きがあります。それらの働きは教会から給与を得ている者たちがする仕事ではないのです。教会の様々な奉仕は、プロフェッショナルなクリスチャンたちが行なうものではありません。教会の様々な働きは、信徒たち一人ひとりがその賜物を生かして為して行かなければいけないものなのです。神の計画において「すべてのクリスチャンは奉仕の働きをしなければいけない」のです。

私たちの「奉仕の働き」にはどのようなものがあるでしょう？考えるとすぐに分かります。私たちの奉仕の働きは神に向けられています。それは礼拝という形で様々な所で現われます。また、私たちの奉仕の働きはお互いのクリスチャンたちを励まし助け合うところにも現われます。また、未信者に伝道するところにも現われます。それぞれが与えられた賜物を用いて成長して行くゆえに、熱心にその賜物を生かして働きを為す、それが教会のあるべき姿です。

６．教会の成長へ

皆さん、教会の中には観客はいません。教会には傍観者は存在しないのです。教会を構成するすべてのクリスチャンたちが、与えられている賜物を用いて、自分がその働きを為して行くことが神に要求されているのです。そのように聖徒たちが整えられて奉仕の働きが為されて行くと、教会は成長するのです。エペソ４：１２に書かれていました。**「それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、」**と。教会が成長して行きます。教会がキリストのからだにふさわしいものへと変わって行きます。私たちが教会において、神が教会に与えられた賜物を持ったリーダーたちを正しく選び出し、彼らを認め、その地位に就け、そのリーダーたちがみことばの学びと祈りに熱心になって働きを為して行くときに、教会員一人ひとりは成長し奉仕の働きを為して行きます。そして、教会が成長して行くのです。これが神の設計図、教会の設計図です。神の教会は、神の計画に沿って、神の指示に沿って進んで行かなければいけません。これこそが成功する教会を造るための大前提です。教会にとって成功というのは、集まって来る人数、たくさんの働き、また、財政的豊かさ、それらによって測られるものではありません。教会の成功はたった一つのことによって測られます。それは、神の命令に沿って教会が建てられるかどうかです。キリストはご自身の教会を建てると約束されました。キリストがその教会を建てると約束されたのです。このキリストはご自身の血をもって教会を買い取られました。それゆえに、今起こっている世界中のあらゆる出来事の中で、イエスが一番関心をもっておられることは、教会がどのように建てられるかということです。そして、それは私たちの最大の関心でなければいけないだろうと思います。私たちは神の計画に沿って、神の設計図をよく見て、それと一つも違うことなくこの教会を建てなければいけないのです。

☆教会の最終到達地点

今朝、私たちは続けてこのエペソ人への手紙を見て行きます。４章１１節から１６節の所を見ているのですが、今日は１３節に焦点を当てて見て行きたいと思います。それによって、皆さんといっしょにもう一度、パウロがここで教えようとしている「教会とはどのようなものか、神が持っている設計図がどのようなものか」をしっかりと理解し、願わくは、この教会がその設計図に沿った教会となるように、私たちはそのことを学んで行きたいと思います。４：１１－１６を読みましょう。

「:11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。:12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、:13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。:14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、:15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。:16 キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」

パウロは最初に、キリストが教会に対して賜物を持った者たちをお与えになったことを教えました。１１節にそのことが書かれてあります。二番目に、キリストが賜物を持った人たちを教会にお与えになったのは目的があったからだと、その目的が１２節に記されていました。**「それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、」**と。今日、皆さんといっしょに見るのは１３節に書かれている三番目の事柄です。

それはキリストはこれらの人たちを到達点をしっかりと据えた上で与えているということです。たどり着かなければいけない「最終到達地点」があるのです。パウロはそれをここで私たちに教えています。その到達点をひと言でまとめるなら、それは私たちが完全になるということです。私たちの完成です。実は、このことは非常に大切なことです。私たちが知らなければいけないことです。なぜなら、私たちはそこに向かって教会を建てなければいけないからです。最終的に教会が行かなければいけないところをパウロが記すゆえに、私たちはそれをしっかりと見据えて、そこに向って教会を建てて行かなければいけないのです。そして、ここでパウロが語っている非常に大切な事柄を、皆さんといっしょに理解することに努めて行きたいと願います。

≪１３節に対する四つの質問≫

この１３節を見るに当たって、ここから四つの質問をしてその答えを見て行きたいと思います。パウロはここで「教会がたどり着くべき最終到達地点」を私たちに示しています。

１．だれが最終到達地点に達するのか？
２．どのようにして最終到達地点に達するのか？
３．最終到達地点とは何か？
４．私たちはいつ最終到達地点に達するのか？

今日と来週の２回に分けてこの四つの質問を見て行く予定ですが、なぜ、１３節にこれ程の時間をかけるのかと問われるなら、ここに書かれていることが非常に大切な事柄だからです。とても深いことが書かれているのです。願わくは、皆さんといっしょにその多くを考えることが出来、それを理解することが出来るように、そして、そのことによってこの浜寺聖書教会がまさに神の設計図に沿って到達しなければいけないその場所をしっかりと見据えて、そこにふさわしい形で到達することができるようにと願います。

１．だれが最終到達地点に達するのか？

この１１節からの流れを見て行くときに、パウロがいろいろな主語を使っていること、また、いろいろな人に焦点を当てていることに気づきます。１１節では「キリスト」が主語になっていました。キリストに焦点を当てているのです。キリストが教会にこれらの人たちを与えたと言います。１１節にはその人たちがだれなのかが記されていますが、１２節に入ると、与えられたその人たち、使徒、預言者、伝道者、牧師・教師と呼ばれる人たちが焦点になっています。彼らが聖徒たちを整えると言います。そして、この与えられた教会のリーダーたちを通して整えられた人たちが何をするのかが書かれています。聖徒たちが奉仕の働きをするのです。ここまでですでに焦点が３回変わっているのですが、１３節を見るとまた主語が変わるのです。１３節の主語は一人称複数の「私たち」です。しかも、この「私たち」には強調を示すこのようなことばが付けられています。**「私たちがみな、」**と。この「私たちすべてが」ということばこそ、この一番目の質問の回答なのです。

１）「私たちがみな」：信徒の堅忍

いったいだれが最終到達地点に行くのでしょう？**「私たちがみな、」**です。この**「私たちがみな、」**という小さな余り重要でなさそうに見えることばになぜ私が止まるのか、皆さん不思議に思われるかもしれませんが、このことばは非常に重要なことばです。これは私たちに「すべての真のクリスチャンは例外なく、必ず、キリストが教会のために建てられている到達地点に行く。」、そのことを私たちに教えるのです。だれ一人、キリストにあるこのレースから脱落する者はいないのです。みな必ずそこに到達するのです。このことを神学的には「信徒の堅忍」とか「信仰の維持」ということばを使います。

今朝のこのメッセージを神学の授業にしないで簡単に説明するなら、「信徒の堅忍、信仰の維持」というこの教理はこのようなことを教えます。「真に生まれ変わった者たちはみな、必ず最後まで耐え忍ぶ。」、このことを説明する箇所は聖書の中にたくさんあります。最もはっきり説明している箇所はヨハネの福音書６章だろうと思います。イエスが語っていることばをヨハネはこのように記しています。６：３７**「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」**、ここにはとても大切な教理がたくさん含まれていますが、敢えて、簡単に言うなら、イエスはここで「救いにおいて神が主権者だ」ということを話しているのです。だれを救うのかは神が選んでおられて、そして、その救われた者をキリストに与えると話しているのです。そして、イエスはここで「わたしはだれも捨てない」と言っています。父なる神がわたしに与える者をわたしは決して捨てることはしないと。イエスが守ってくださる、信仰が守られるということです。救いが間違いなく与えられるということです。

２）「決して捨てない」、その理由

その理由が３８節に記されています。**「わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。」**、なぜ、イエスはだれ一人として捨てることをしないのでしょうか？**「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」**と言われるのでしょうか？その理由はここにあったのです。それは主イエスが神のみこころを守るからです。神のみこころ、それが３９－４０節に記されています。**「わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。:40 事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」**と。非常に単純なことです。イエスは言われます。「父なる神はわたしに人々を与えてくださった。与えられた人々をわたしは決して捨てることはしません。なぜなら、わたしは父

のみこころを行なうために来ているからです。」と。その父のみこころとは**「わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、」**と、これが神がイエスをこの世に遣わした理由なのです。皆さん、そのことを考える時に、もしキリストが神がお与えになった人たちのうちのたった一人でも捨てられたら、たった一人でも失ったとするなら、それは何を意味しますか？イエス・キリストは御父のみこころを破ったことになります。そのようなことは絶対にあり得ない。だから、イエス・キリストを信じ、イエス・キリストのものとなった者たちは、何があったとしても必ず最後まで到達するのです。信仰が維持されるのです。信徒は堅く忍んで必ず最後までたどり着くと。

パウロはこのように言います。エペソ１：１３－１４**「またあなたがたも、キリストにあって、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。:14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であられます。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。」**、神は私たちが確かに永遠のいのちを得たというその証明として、私たちに聖霊を与えてくださったのです。それゆえに、聖霊を受けた者、つまり、本当に救われた者たちは、必ず、永遠のいのちと天における報いを受けることが保証されているのです。それが破られることはないのです。ペテロもまた同じことをこのように言います。Ｉペテロ１：５**「あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。」**、**「あなたがたは、信仰により、」**と、つまり、信仰を持っている者たち、神によって救われた者たち、神によって聖霊が与えられた者たち、イエス・キリストのものとなった者たちが、この最終到着地点に到達しないことはあり得ないのです。

３）本当に生まれ変わった「私たちがみな」

けれども、この教えはもう一つの事柄を私たちに示します。それは「信仰を持たない者たちは最後まで歩み続けることはない」ということです。イエスはヨハネの福音書８：３１でこのようなことばを告げておられます。**「…もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。」**と。つまり、イエスが言っていることは「もしあなたがたがわたしのことばにとどまらないならば、あなたがたは本当に私の弟子ではありません」です。マタイ１０：２２では**「また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」**とイエスは言われています。つまり、この教理が同時に私たちに教えることは、最後まで耐え忍び続けた者だけが本当に救われている者たち、本当に生まれ変わった者たちだということです。ヨハネはこのことをよく分かっていたゆえに、ヨハネの手紙の中で、信仰から離れ教会から去って行った者たちについてこんなことばを記しています。Ｉヨハネ２：１９**「彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であったのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなったのは、彼らがみな私たちの仲間でなかったことが明らかにされるためなのです。」**と。

パウロはエペソ４：１３で**「私たちがみな」**と言いました。**「私たちがみな」**そこに到達すると言ったのです。だれひとりとして見捨てられる者はいません。だれひとりとして目標に到達できない者もいません。もし、本当にあなたが救われたなら、もし、その信仰が正しいものであなたが確かに生まれ変わった者であるなら、必ずそこに到達できると言います。なぜなら、これこそがまさに神のみこころだったからです。これこそがまさに神が御子イエスをこの世にお送りになった理由だからです。皆さん、神の計画はすごいと思いませんか？神はこの計画をもって御子をお送りになったのです。そして、御子はこのことが成されるように十字架に架かって死に、そして復活され、キリストに属する者たちを集められました。教会が生まれました。その教会のために、私たちがエペソ４章で見た通り、キリストは賜物を持った者たちをお与えになったのです。彼らは与えられたその教会にあって、みことばの学びを熱心にし、そのみことばの真理を人々に解き明かしました。それは聖徒たちを整えたのです。彼らはよりすばらしい信仰者として生きて行くことができるように、みことばをもって教え、また、彼らは信徒ひとり一人のために祈って、神からの成長を願い求めました。彼らは整えられて行き、その賜物をもってお互い仕え合います。仕え合って目的地点まで一生懸命ともに歩んで行くのです。

４）仕え合う「私たちがみな」

なぜ、だれひとりとして落伍者が出ないのでしょう？もちろん、神がそのように定めておられ、そのように導いておられることが決定的な理由ですが、同時に、神はそれが間違いなく起こるように、そのために私たちにみことばを教える者たちを備えてくださり、お互いの賜物を生かして、お互いが励まし合い、助け合い、慰め合い、導き合い、教え合って、一生懸命歩んで行くことができるようにしてくださったのです。すばらしい構図だと思いませんか？神は私たちがそこに到達できるように助けてくださっているのです。そして、その信仰を神ご自身が支えてくださっているのです。

皆さんはどう思われるか分かりませんが、このことは私にとって大きな慰めであり喜びです。なぜな

ら、私自身の様々な失敗や不完全さにもかかわらず、いつか必ず皆さんといっしょにこの栄光の到達点に足を踏み入れるからです。皆さんといっしょに**「私たちがみな」**その目標へと到達するからです。本当に生まれ変わって、真にイエス・キリストを信じている者、イエス・キリストを主として救い主として崇め従っている者たち、彼らはみな罪の束縛から解放され、義の奴隷としてこの地上での生涯を全うし、神からの栄光を受けるそのところへと足を踏み入れるのです。

だれが最終到達地点に到達するのか？**「私たちがみな」**です。

２．どのようにして最終到達地点に達するのか？

では、どのようにしてそこに到達するのでしょう？この答えもパウロのことばは非常にシンプルで単純です。けれども、そこに書かれていることは非常に深く、多くのことを考えさせられるものです。パウロは「いったいだれがここにたどり着くのか」と問い、**「私たちがみな」**と言ったのですが、その主語に対して使われている動詞は１３節の最後に出て来る**「達する」**ということばです。**「私たちがみな…達する」**のです。このことばはギリシャ語の原文を見ると、直訳すれば「たどり着く、到着する」という意味を持っています。事実、このことばは多くの場合、実際にどこかの目的地にやって来たそのことについて使われています。例えば、使徒の働き１８章にはこのことばが２回出て来ます。１９節と２４節です。１８：１９**「彼らがエペソに着くと、パウロはふたりをそこに残し、自分だけ会堂にはいって、ユダヤ人たちと論じた。」**、この**「エペソに着くと」**ということばが同じことばです。２４節**「さて、アレキサンドリヤの生まれで、雄弁なアポロというユダヤ人がエペソに来た。」**、この**「エペソに来た」**も同じことばです。どこどこの町にやって来た、到着したということです。

１）信仰生活は「旅路」：前進しながら

パウロがここでこのことばを使うことには大きな意味があります。もちろん、パウロは私たちが具体的に字義的に目的地に到達したということを言っているのではありません。彼は比喩的にこのことばを用いているのですが、このことばを使うことによって、私たちの頭の中に、私たちクリスチャンが出発地点から始まって到着する最終目的地へ向かって足を進め、いつか必ずそこにたどり着くということを思い描かせるのです。信仰生活は旅路なのです。この出発地点は当然のことですが私たちが救われたところにあります。私たちは救われてこの歩みを始めて行きます。そして、教会のリーダーたちの教えを通して、私たちは一歩一歩成長し、その足を進めて行き、クリスチャン同志が互いに助け合うことによって、いつの日かその場所へと到達するように歩みを進めているのです。

パウロはこの同じことばを自分自身の個人的な目標地点に到達することを指して、ピリピ３：１１で使っています。３：１０－１１にはこのように書かれています。**「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、:11 どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」**、**「死者の中からの復活に達したいのです。」**とパウロは同じことを言っているのです。自分が目標としていることと教会が目標としていることは同じであると。そして、この文脈の中でパウロは、自分がいったいどこから始まって、どのような過程を通って今目標に向かっているのかを教えているのです。７－８節にはその出発地点が記されています。今まではこのような事柄を誇って来たけれども、私は今それらを「ちりあくた」と思っている、キリストを知ることに比べればそれらは全く価値のない意味のないことですと言います。そこから始まったパウロはどのようにして目標地点にたどり着くのかということをその後記しているのです。クリスチャンの生涯はこの目標地点に向かって続ける旅路であるゆえに、真に救われている信徒は、同じ場所に踏み留まりそこから動かないでいることは決してありません。真のクリスチャンが信仰の旅路において前進しないことはあり得ないのです。たとえ、それがどれほど小さな一歩であったとしても、必ずクリスチャンはその信仰の生涯において前へと進んでいるのです。

この概念はエペソ４章の後で使う「子どもから大人になる」という概念においてさらに強調されています。パウロはこの人間の成長という概念を用いることによって、クリスチャンが一歩ずつ成長して行くその原則を私たちにはっきりと示しています。それはちょうど子どもたちが大きく成長して行くことと同じです。皆さんも３歳の子どもが３歳らしい姿をしているのは普通だと思います。でも、そこで成長がとまって、１０歳になっても２０歳になっても３歳の姿をしているならおかしいと思いませんか？問題があると思いませんか？クリスチャンならそうであってはおかしいとパウロは言うのです。それこそがまさにパウロが**「達する」**ということばをもって私たちに示そうとしたことなのです。

ここで何よりも驚くべきことは、パウロ自身がこの旅路に自分を含んでいるということです。この手紙を書いた時点でパウロはもう既に３０年近くキリストの使徒としての働きを為して来ました。教会のリーダーとして、教会の土台を据える者として、神の啓示を直接受けて人々に教える立場として生きていたのです。でも、パウロは言うのです、**「私たちがみな」**と言って自分自身をこの旅路に含めるのです。

皆さん、この信仰の旅路には楽な道のりはないのです。ある日起きると私は成熟した者になって到達していました、ということはあり得ないのです。パウロは３０年以上かけてまだ「私は達していない」と言うのです。ちょうど人間の成長と同じように、霊的成長も時に成長期を迎えることがあります。夜寝て朝起きたら突然声が変わっていたということがあるじゃないですか？夜寝て朝起きたら身長が１０センチも２０センチも伸びていた、これは大げさかもしれませんが、そのように大きく成長する時は確かにあります。でも同時に、私たちの成長で考えるなら、日々には余り見分けがつかないと思いませんか？３ヶ月位経ってから「あぁ、随分背が伸びましたね」と思うかもしれませんが、毎日顔を合わせているとそれに気づかないことはたくさんあります。信仰の成長も同じように、時にぐーんと成熟度が増すこともあれば、時にそれは余り気づかない形で起こるかもしれません。

長い旅路において、この当時、飛行機に乗って旅したのではありません。車もありませんし大きな客船もありません。また、電車などの交通手段があったわけでもありません。彼らはみな歩いていたのです。時にその旅路は楽なものでしょう。心地よい風が吹きすばらしい景色を眺めながら楽しく歩くことができた時もあるかもしれません。でも、それよりもはるかに困難な道が多かったと思いませんか？辛く苦しい道のりが多くあったのです。でも、それも信仰の歩みと同じなのです。それでもパウロは、私たちクリスチャンは必ずその到着点に到達するために、みなその歩みを進めていると言うのです。

２）目標を目指して：一心に

先ほど見たピリピの３章でパウロはこのようなことばを告げます。ピリピ３：１２**「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。」**と、パウロは心からキリストを知りたい、その姿にあずかりたい、キリストのようになりたいという願いを訴えています。彼は**「死者の中からの復活に達したい」**と心から願い求めています。３０年近くキリストに仕えながらパウロは「まだ私はその最終地点に到達していない」と大胆に告白します。そして、だからこそ私は熱心に、まるで短距離走を走るランナーがゴール地点目がけて体をいっぱい伸ばすかのように、一生懸命その目的地に向かって私は歩んでいると言うのです。

次の２節でパウロは言います。１３－１４節**「兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、:14キリスト･イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために､目標を目ざして一心に走っているのです。」､**パウロは一つのことだけに注目していたのです。一つのことだけに関心があったのです。そこに到達したい、キリストを完全に知りたい、キリストのようになりたいと、そのようにパウロはその人生を歩んでいたのです。もし、使徒であったパウロ、ひょっとするとこの地上に生きていた人間の中で、信仰において、クリスチャンとして最も成熟していたかもしれないパウロが、この一事のために熱心に生きようとしていたとするならば、それよりはるかに劣る私たちは、パウロ以上にそのように生きて行くべきだと思いませんか？もっとこの一事に励むと。

３）信仰生活の吟味

皆さん、確かに霊的な信仰の旅路というものは時に苦しいものです。楽なものではありません。確かにこの信仰の旅路は長い時間をかけて歩むものです。けれども、もし、皆さんがイエス・キリストの名を呼び求める者であれば、もし、イエスを主と告白する者であるとするならば、もし、自分が神の子どもに属すると言うならば、皆さんは同じ場所に立ち続けていることは考えられないのです。あってはならないのです。皆さんが自分自身の人生を正直に吟味して、今日の自分と１年前の自分を比べた時に、今日の自分と５年前、１０年前、２０年前の自分を比べた時に、その信仰において皆さんがよりキリストに似た者になっていると言うことができないとするなら、いや、むしろ私は前よりも悪い状態にいるかもしれないなどと、もし、皆さんがそのように思うなら、もし、皆さんが立ち止まっていたり後退していたりするならば、皆さんよく考えなければいけません。なぜなら、その姿は明らかに大きな問題を持っている姿だからです。

成長しない、歩みを進めないクリスチャンはいないのです。なぜならば神からいのちを得て、そのいのちは必ず成熟へと向かって成長するからです。もし、皆さんが正直に自分自身と向き合って、自分の信仰生活を振り返って、救われた時の自分、５年前、１０年前、いや去年の自分と比較して、自分の霊的状態が停滞している、または後退しているならば、私は皆さんのうちにこの三つのうちのどれかが起こっているだろうと思います。厳しいことを言うかもしれませんが、どうぞ忍耐を持って聞いてください。もし、皆さんの人生が、信仰状態が停滞していたり後退しているとするならば、考えられる一番目の理由は、皆さんが救われていると言いながら実は救われていないからであるかもしれません。なぜなら、救われていない人たちは絶対この旅路を続けることができないからです。私たちはみな到達するの

ですが、そこに到達する者は本当に救われている者たちだけだからです。だから、救われていないなら旅路を続けることはできません。停滞し、後退し、離れて行きます。だから、もし皆さんの信仰生活がキリストに似た者へと変わっていないならば、ひょっとしたら皆さんはその信仰自体を吟味しなければいけないでしょう。

二番目に考えられるのは、皆さんのうちに解決していない「罪の問題」があるということです。もし皆さんが罪を持ったままで成長することができると思うなら、それは大きな間違いです。確かに、私たちは残念ながら日々の生活の中で繰り返して罪を犯しますが、もし、私たちが主の前に告白しない、主から正しく赦されていない、そこから立ち返り前進しようとしていない罪を持ち続けているとするならば、またはそれにしがみついているとするならば、私たちは決して前に進むことはできません。救われていたとしても、そのように罪を抱えながら生きようと思うならば、私たちは絶対に前進することはないのです。だから皆さん、自分の生涯を吟味しなければいけません。もし、そこに赦されなければいけない罪、悔い改めなければいけないものがあるなら、主の前にそれを告白し、赦され、前に進むべきなのです。でも、それができていないなら成長はありません。

そして三番目に、皆さんが来ている教会が正しく神のみことばを皆さんに述べ伝えていないからかもしれません。なぜなら、皆さんの成長を促すものはみことばだからです。皆さんに成長をもたらすものは、皆さんがみことばをしっかりと理解し、それを真理だと確信し、それに自分の思いを沿わせて生きて行くからです。もし、この講壇から語られることばが神のみこころに沿ったものでなければ、聖書にふさわしい正しい真理でなければ、皆さんの成長は起こりません。だから、もし皆さんが成長していないとするなら、そのことが原因なのかもしれません。もし、停滞しているとするなら、後退しているとするなら、どちらにしろ私たちはよく吟味しなければいけないのです。なぜなら、クリスチャンは必ず前へ進んで行く者たちだからです。これは非常に大切な問題です。真剣な問題です。もし、これらの三つのうちのどれかが皆さんに当てはまるとするならば、皆さん変わらなければいけません。救われていないなら救われなければいけないし、罪を犯してそれを持ち続けているとするなら、それを悔い改め、そこから立ち返らなければいけないし、もし、この講壇から正しくないことばが語られているならば、その者を取り除かなければいけません。どうぞ、私を取り除いてください。ふさわしい者をここに立たせてください。もし、皆さんが来ているこの教会が「みことば」を語らなくなったら、どうぞ、正しく語られている教会へと変わってください。なぜなら、神が建てられる教会というのは、神の設計図に沿って建てられるものでなければいけないからです。

４）慰め合い、励まし合いながら

皆さん、子どもといっしょに旅をしたことがありますか？ハイキングでも何でも構いません。３０分、１時間と歩いて行くと、必ず聞いて来ることばがあります。「まだ？」ということばです。このことばは最初はそんなに頻繁に出て来ないのですが、長い道のりが続いていつまで経ってもそこに着かないと、子どもたちはそのことばを発するまでの時間が段々と短くなって来ます。「まだ？」「まだ？」「まだ？」と。未熟なクリスチャンも同じことを言います、「まだ？」と。ただそれを言うだけではありません。子どもたちと同じように「あぁ、やっぱり私は来なければよかった」、「こんなに辛いなら引き返した方がいいかなぁ」と。信仰生活も同じです。幼い者たちはその苦しみのゆえに落胆し、希望を失い、継続したくないと願うかもしれません。成熟したクリスチャン、いや、子どもをいっしょに連れて歩いている大人たちは何と言いますか？「もうすぐだよ、頑張ろうね。」、「ほら、こんないいことがあるじゃないか」と、なだめ、励まし、慰め、助け、時には手を引いて、時には背中に背負って子どもたちといっしょに目的地に向かって歩みを進めませんか？成熟したクリスチャンは同じことをします。教会の中でどのようにして成長が起こりますか？みことばが成長をもたらします。一人ひとりがしっかりと祈って、神がひとり一人のうちにみことばを通して働きを為す時に教会員の成長が始まります。でも、みな立っているところが違うではないですか？成熟の度合いが違うではないですか？子どもたちは時に落胆しやすいかもしれないし、成熟した大人たちでも時にくじけることがあるかもしれません。だから、神はお互いを与えてくださったのです。慰め合い、励まし合い、助け合い、時に戒め合い、教え合って、私たちはこの信仰の旅路をともに進んで行くのです。何よりもすばらしいことは、だれひとりとして、本当に救われている者たちは落伍することがないのです。絶対に到達するのです。

三番目と四番目の質問は来週にします。でも、皆さんよく覚えてください。私たちはみなたどり着くのです。信仰の旅路を一歩一歩足を進めながら……。そのような教会でありましょう、そんな教会を目指しましょう、そんな教会としてこの地上に神のすばらしさを証して行きましょう。